



今年の干支は戌年です。この戌という字はただの犬ではなく、賢い犬を指すのだ、という説もあるそうです。賢い犬というと、私が思い浮かべるのは忠犬ハチ公です。ハチ公像は広く親しまれ、また『ハチ公物語』として映画のモデルにもなりました。少し前になりますが、2009年にはハリウッドの映画にもなり、外国の人たちにも幅広く認知されているそうです。

ハチ公の像は渋谷駅にあるものが有名ですね。待ち合わせ場所としてよく使われるのですが、あまりにも人が多く人が集まっているので、かえって人を見つけにくいというのが難点ですが。

渋谷のハチ公像を見ると、ハチ公を目印に待ち合わせをしている人はすぐに落ち合っているのに、ハチ公が待っている人はいつまで待っても来ないんだな、と思ってしまうんだかわいそうな気持ちになったことがあります。

それが数年前、感動的な像ができてきました。それはハチ公と飼い主さんが再会している銅像です。東京大学弥生キャンパスの一角に出来上がりました。ハチ公の飼い主だった上野英三郎さん(ひでざぶろう)は東京大学の農学部教授を務めていた方ですが、そのような縁から農学部がある弥生キャンパスにこの再会の銅像が作られることになったそうです。

ずっと待つばかりだったハチ公ですが、こうして上野さんと再会することができたのだなと思うと心を動かされます。この像のハチ公は体全身で再会を喜んでるのが伝わってきます。一体何年、何十年待ったのでしょうか。「ハチ、よかったね」と思わず言ってしまうほど感動しました。

今年は戌年。ハチ公のように大切な人との出会いと再会に恵まれる一年になりますように。

◆久松彰彦(ひさまつしょうげん)

今月のエッセー

今年も戌年

1月号 ひだまり

仏教のことば

之を護惜すること 眼睛の如くせよ



今回紹介する言葉は、永平寺を開かれた道元禪師によって書かれた「典座教訓」という書物の中に登場し、あらゆる物を自分の目玉のように扱いなさいという意味が込められています。

主に禅宗寺院の台所を預かる典座というお役の僧に対して向けられた言葉であり、これとは食材を指し、材料が揃ったら自分の目のように大切にしなさいと示されました。料理される方でも想像が出来るかと思いますが、食材は最初からきれいな状態ではなく、物によっては泥だらけな物もあります。しかし、き

れいに洗い流した物と比べてみたら粗末に扱われがちです。一体何が違うのでしょうか。唯一変わるとすれば、泥が付いていること以外何も変わるところはありません。

仮に違うとすれば、私たちが意識的に区別し、分けてしまっているから違いが生じているだけなのかもしれません。

自分の目、ひいては体全体と同様に、食材は私たちを構成する大事なものです。区別することなく同等に扱い、大切に出来たらこれほど素晴らしいことはありません。

◆伊藤正法(いとうしょうほう)

編集後記

明けましておめでとうございます。エッセーにも登場しましたが、戌年の本年は玄関や年賀状など随所で可愛い犬の姿を見かけますね。でも私にとって一番可愛いのは、実家のお寺にいるシーズーのコロ。人懐っこい性格のためお檀家さんに大人気で、近所の子供達も遊びに来ます。

二十歳の頃に赤ん坊の子犬を譲り受けてから早七年。人間に換算するとコロは今年で約四十四歳です。いつのまにか私の前を歩いているのは、散歩の時と同じだなあと思う今日この頃。

戌年だなんて知る由もないコロですが、今年は時間の許す限り、目一杯遊んであげよう。年の初めにそんな風に思いました。

◆本田真大(ほんだしんたい)

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

法のお話



山内弾正
一年度

ほとけのこころ

アメリカの作曲家ジョン・ケージが手掛けた「4分33秒」という作品を御存知でしょうか。これは、最初から最後まで音が一切鳴らないという、ともすれば矛盾した性格を持つ、無音の音楽作品です。

私が初めてこの作品を鑑賞した時、何も聞こえてこないことに戸惑い、頭の中で作品について考え込んでしまいました。しかし、作品が進行するうち、ただその作品があるがままに享受することで、それまで気にも留めなかった様々な音が身の回りにあふれ、自身の存在する空間を彩っていることに気付かされたのです。音楽が鳴っていないのは出会えない、聴くといった姿勢で体験する静寂にとっても衝撃を受けたことを

よく覚えています。

この体験は、今までの私の中にあつた「音を聴く」という認識を改めると同時に、ものの聴き方・見方に対する意識を改めさせるものでした。というのも、今までの私は、自分の感じている世界がとにかく絶対的なもので、それが唯一のものだと思いついていたからです。

だからこそ普段の私は、一度こうだと思ひこんでしまうと中々そこから視点を動かす事ができないのかもしれない。自身の近くに溢れていた様々な音に気付かなかつたのかもしれない。そんなことを、この無音の作品から感じていました。

それからしばらくして、お坊さんとして勉強している時のことです。お経の中の一節に、この体験を思い出させるものがありました。

「一切衆生悉有仏性」

『大般涅槃經』と呼ばれる經典の中に出てくるこの一節は、「世の中にある全てのものには仏としての心が宿っている」ということを表しています。しかし、私たちの周りに仏の心があると云っても、なかなか実感がわきません。この一節を初

めて読んだ時の私もそう思いました。しかしその後で、「4分33秒」を鑑賞した際に体験したことを思い出したのです。

あの時、身の回りに溢れている様々な音に気付かなかつたように、普段から身の回りにはあるはずの仏の心に気付けない。これも、自分の感じている世界が絶対的なものだと思つて、目の前のもの、焦点を合わせているものに集中しすぎていたからなのかもしれない。仏の心に気づくためには、まず、自分の中にある一つの視点にこだわりすぎず、目の前の物事があるがままに受け取つていく。これが大事なのではないだろうか。そんな風に考えるようになりました。

諺に「近くて見えぬは睫」とあるように、近くのものであればある程見えづらく、普段意識しないからこそ、その価値にもなかなか気付けないものです。

本来私たちの周りにはある仏、私たち自身の中にある仏、すぐそばにある大事なものに気付くためにも、「4分33秒」から得た気づきと「一切衆生悉有仏性」の一節を忘れず、日々の暮らしの中から仏の心を見つけていきたいと思ひます。

お寺散策

豊川稲荷 東京別院

東京メトロ銀座線、赤坂見附駅を降り、赤坂の繁華街を抜け青山通りを渋谷方面へ少し歩くと、真っ赤な提灯が連なつたお寺が見えてきます。

通称「豊川稲荷 東京別院」と呼ばれますが、ここは愛知県豊川市にある「豊川稲荷」の直轄寺院です。正式には「円福山豊川閣妙厳寺」と称され、日本三大稲荷の一つとも言われています。

一般的に「稲荷」と呼ばれる場合は「狐を祀つた神社」を想像される方が多いと思われませんが、ここでお祀りしているのは「吒枳尼真天」です。吒枳尼真天は、インドの古代民間信仰由来する仏教の女神ですが、日本の穀物、農業の神様である稲荷神と同一視されるようになりました。

明治以降の赤坂では、料亭や芸者などが集まる花柳界が発展し、芸道を生業とする人々からの信仰も増えたため、現在でも著名芸能人、スポーツ関係者も多く参拝に訪れます。



山門



奥の院

◆深澤亮道

ひだまり書房



『ポケットに名言を』

著 寺山修司

本書は「あゝ荒野」などで知られる寺山修司が、小説や映画など様々な分野から選りすぐった名言集です。昭和五二年の初版から現在に至るまで読み継がれ、頁を繰れば老若男女問わず人生の様々な場面に寄り添う名言に出会うことが出来ます。高校生の時、図書室の在庫整理の棚を見ていて、表紙の絵に惹かれて手に取つたのがこの本との出会いです。

「おれにわかるのは、何かをしなくてはならないのだということ、それが何なのかよくわからない。時がくればわかるだろうが、俺は本物をつかむまでやるんだ。わかるかい。」

古臭い訳語、元の作品から乱暴に切り取られた一節であるが故に、当時の私にとって本書はとても難解でした。しかしそんな中で、ジェームス・ディーンを知るきっかけになったこの一節だけは、すんなりと腑に落ちたことを今でも覚えています。

◆本田真大